

サブウェイ

佐野 広実

第五話 誰を信じますか

一

走行していた列車が、停止した。

——ただいま東京直下で大きな地震が発生しました。そのため列車は走行区間で急停止しております。落ち着いて指示に従ってください。

アナウンスが車内に響き、車内の照明が非常灯に切り替わった。乗客は床に伏せるよう、指示が出された。

警報音がしばらく続いたあと、ふたたびアナウンスが流れる。

——これより上野駅まで線路を伝って移動していただきます。通路は危険ですので乗務員の指示に従ってください。

伏せていた乗客が身体を起こし始めると、乗務員が先頭車両の運転席中央にある非常口を開き、タラップを下ろした。

「こちらから降りて、通路の端を進んでいただきます」

ひとりひとりタラップを降り、指示に従って通路を進んでいく。

ほどなく「上野駅」に到着し、ホームに乗客が上がった。

「整列」

ホームにいた女性の指導教官が声を上げ、明美^{あけみ}たちは小走りになつて三列に整列した。全部で三十人。

「以上が地震発生時の避難手順です。指示は乗務員がおこないますが、お客さまの中にはパニックになるかたもいらっしゃるかもしれません。みなさんには、そういった場合の対処をお願いすることになります」

列車から避難することになるのはまだし、走行区間で緊急停車をすることは頻度としては低い。たいていは駅まで走行して停止することになっている。だが、地震のときにさううまくいくかどうかはわからない。

万が一走行区間で停止し、駅まで線路の脇を伝っていかななくてはならなくなったとしたら、体調不良になる乗客は確実に出るだろう。パニックが起きて指示に従わない乗客もいるかもしれない。そうなったとき、明美たち私服の警備員が乗車している場合には、的確な対処をしなくてはならない。

「地震のような大規模な件でなくとも、ちょっとしたことがおおごとにつながる場合もあります。たとえば車内にスズメバチが飛び込んできたら、どうしますか」

指導教官は、居並ぶ警備員に視線を向けた。

誰も返答はしなかったが、それぞれに考えをめぐらせているようだった。ハチは予測のつかない動きをするし、対応するにしても素早く移動するからむずかしい。以前の車両は窓が開けられたが、いまはめ殺しになっているから、車外に追いつくのは不可能だ。

「答えがあるわけではありませんが、つねに万が一の場合を考えて行動する必要があります。たとえば夏から秋にかけて殺虫剤を携行するというのもひとつの考えでしょう」

冗談めかして口にした。警備員の中からも失笑が起きたが、対応手段を考えていくと、それしか方法はないようにも思えた。もつとも、そうなるとう度は車内で殺虫剤を散布して安全かどうかの問題になってくるだろう。

「ほかにも注意すべき点として、間違った情報に踊らされない、ということがあります。最近では乗客の勘違いでおおごとになるような事例も起きています。乗客のひとりが刃物を持ち、振り回している。そう聞いたとき、それが本当なのかどうか、冷静に考える必要があるということです」

少し前に、JRの路線で起きた一件だ。調理師が布にくるんだ包丁を持って乗車したが、うとうとしているうちに布が落ちて、「刃物を持っている人がいる」と乗客が騒ぎ出した。

警備員としては、それが事実かどうか、重大な事案を引き起こすかどうかを冷静に判断しないとならない。大地震は言うまでもない。デマや勘違いを頭から信じてしまつては、警備員としては失格だろう。

地震や広域な事件や事故の場合は通信指令から直接連絡が入るから、警備員も判断を間違えることはないだろう。しかし、流言が車内を走って乗客が的確な判断をできなくなってしまう可能性は大いにあるということだ。

その場合、明美たちの取るべきは、デマを打ち消すことだ。

地下鉄会社としては地震対策の訓練が定期的におこなわれるのは当然だったが、それにとどまらない訓練だといえた。

「では、今回の研修はこれで終わりです。お疲れさまでした」
教官の声とともに「上野駅」のホーム上で、解散となった。

むろん、本当の上野駅ではない。新木場しんきばにある研修所内に作られたホームである。

ここにはまったくそっくりなホームが作られ、じっさいに本物の列車を使った研修がおこなわれている。おもに運転士と車掌のためのものだが、明美たち私服の車内警備員も駅職員などと一緒に研修を受けることになっていた。

毎月一回、遅番の次の日が研修になっていて、その翌日が非番に

なる。つまり、そこで一日勤務の曜日がずれることになる。

月ごとに内容は違っていて、午前中は研修ルームで一時間半の講義をふたつ聞く。法律の話や心理学の話など、職務に関して知っておくべき知識に関するものだ。午後は地震、水没、人身事故といったケースごとの対処の仕方を実地に訓練する。

「どうしたんだらうね」

センターの出口に向かいながら、町村まちむらが声をかけてきた。後ろから追いついた原口はらぐちも少しばかり心配そうな顔になっている。

「来てませんでしたね」

明美はふたりに顔を向けつつ、こたえた。

奥野孝子おくのたかこが研修にいなかったのだ。急用でもあって欠席したのかもしれなかったが、きのうも「エルニーニョ」に顔を出さなかったので、どうしたのかと三人で話し込んでいたところだった。

「また、やっちゃったとか」

原口が右手を殴るように突き出した。

「さすがにそれは」

町村が苦笑しかけ、言葉を切って、明美に視線を向けた。

「ないと思いますよ、それは」

以前、奥野は女子高生を平手打ちしたり痴漢ちかんを殴りつけたりして停職になったことがあった。事情はあったにしろ、乗客に暴力を振

るったということになる。

しかし、同じことをそうそう繰り返すほど愚かおろではないはずだ。明美たち四人の中では、いちばん知的で理性もある。だからこそ、なにかが切れると力に訴えてしまう一面があるのが意外だった。

まだ午後四時を回った時刻だが、明日は非番になるのでこのまま渋谷の「エルニーニョ」へ行こうということになった。

「メールしてみるよ」

研修センターの出入り口まで来たところで、町村がそう言って携帯でメールを送った。

「エルニーニョで待ってるって言つていた」

そこから新木場駅までぶらぶら歩いていると、今度は原口が深刻そうな顔で別の話を持ち出した。

「どうなるのかね」

それだけで明美にも町村にも通じた。

いまやっている私服の警備員についてだ。現在はまだ試用期間ということで、じっさいに効果があるかどうかを見ているところだった。だが、もう一年近くもそれが続いている。そろそろ結論が出てもいいころだった。

正式に導入されるなら、たぶんこのまま明美たちは採用されるだろう。しかし、導入見送りということになれば、どうなるのか。

採用時の契約書には、そのあたりのことは明確に書かれていなかった。臨時採用という形だから、用済みとなればすぐさま契約終了という可能性は高い。とはいえ、企業も理不尽な対応をすればトラブルになりかねないから、それほどひどい扱いは受けないだろう。

四人でああでもないこうでもないと話した結果は、そんなところだった。

どうなるのかはつきりしないまでも、会社側も悪いようにはしないだろう。

だが、それでも先の見通しが立ちにくいから、ほかの私服警備員もその話を振ると心配そうな顔をしていた。

「まあ、年内には決まるらしいって旦那はちらっと聞いたって」

地下鉄運転士の夫を持っている町村が、ため息をついた原口に向かって励ますように言った。

「もし採用されなかったら、また職探ししないとなんないよ。せっかくいい仕事見つけたのにさ。でしょ」

明美に同意を求めてきたから、うなずいてみせた。

たしかにやりがいのある仕事だ。できるなら今後も続けていきたいと思っっている。

もし契約終了となれば、唯一の心残りはまとは的場要一よういちを殺した犯人を見つけ出せなかったことだろう。

もちろん、私服警備をしていれば犯人に巡り合えるなどと安直に思っていたわけではないが、わずかな可能性としてどこかで犯人を見つけられるのではないかという淡い期待があった。この仕事がなくなつたとしても犯人を探し出したいという思いに変わりはないが、この仕事だからこそ地下鉄構内で殺された要一を身近に感じていられたということもある。

「ただちよつと考えてみるとさ。導入されたとしても、大々的に発表はしないよね」

・首都高を横目に見ながら町村が苦笑を漏らした。

「なんでよ」

「だって、私服の警備員が乗ってますって公表したら、どうよ」

「どうって」

原口が首をかしげた。

「誰にも内緒だからこの仕事が成り立ってるわけでしょうが。それに変に乗客がほかの客を私服警備だ、なんて疑うことになつてもまずいしね」

「なるほどね。となるとずっと日陰者ってことか」

やれやれといった顔で原口が肩を落とした。

明美としては日陰者でも構わなかったが、導入の決定だけは早めにしてほしいものだった。

そんなことを思いつつ新木場駅までたどり着いたとき、携帯が振動を伝えてきた。

取り出して確認すると、大崎署の中窪なかくぼ由起ゆきこ子刑事からだった。

たつたいま要一のことを思い浮かべていたこともあり、明美はふたりに断りを入れ、その場を少し離れて電話に出た。

「ご無沙汰ぶさたしました。いまよろしいですか」

快活な中窪の声が届いた。

夏近くに要一の事件に疑問があり、再捜査をされると言われて以来だった。なにか進展があつたのかもしれない。

「いまから署に来ていただけたらと」

電話では話せない内容だと言外に匂わせるような口調だった。

「わかりました。一時間でうかがいます」

明美はそう返事をして通話を切った。

町村や原口に要一の件は話していないが、水臭いと言われてもこちらを優先するのは当然だった。

二

用件が終わって時間があれば「エルニーニョ」へ行く約束し、

明美は月島駅つきしまでふたりと別れ、大江戸線に乗り換えた。

大門駅だいもんで降り、連絡している浜松町駅から山手線で大崎駅へ向かう。

大崎署には事件のあと何度も出向いているが、中窪が捜査の担当になってからは二度目だ。

到着した時には、すでに日が暮れかかっていた。

受付で名乗ると、すぐに見覚えのある中窪の姿が現れ、以前来た時と同じ応接室に通された。

「工藤三郎くどうさぶろうという人物をご存じありませんか」
前置きもなく、中窪は切り出した。

しばし考えたが、そういった名前に記憶はない。素直にこたえろと、中窪の目がじっと向けられた。疑っているように感じられた。

「的場さんの友人と面識はなかったのでしょうか」

「工藤という人が友人だったということですか」

「高校時代の友人のようですが」

要一の出身は兵庫の神戸だ。明美と知り合う前の友人ということだろうか。

「大学時代の友人はたいいてい知っていますけれど」

「大学には行っていませんが、工藤という人物も東京に出てきています」

それでも、工藤という名前を要一から聞いた記憶はない。

「お葬式のときに見かけたということもありませんか」

葬式は青山葬儀所でおこなわれた。年末にもかかわらず、多くの同級生がやってきて、明美は取り囲まれて悔やみの言葉をかけられていたから、注意が回らなかった。たとえ顔を合わせていたとしても、誰が誰なのかわかるはずもない。

「どこかで会っているかもしれませんが、急に言われてもちょっと
「そうですか」

「その工藤という人が、なにか」

中窪はちよつと息を整えるように肩を上下させつつ、手元の書類を明美の方に向けてきた。

「工藤三郎は窃盗で二度、振り込め詐欺の出し子として一度逮捕されています。窃盗は不起訴でしたが、振り込め詐欺の方は一年の実刑を受けました。別件を調べていて工藤の名前が挙がり、ふたりの共通点を見つけたんです」

「というと」

「調書に出身高校が記されていて、卒業年も的場さんと同じでした。それで少し調べてみたら、どうも東京でふたりは連絡を取り合っていたようなんです」

では、その工藤という男が犯人だというのか。

ふとそう思った明美に、中窪は待てと言いたげに首を振った。

「防犯カメラの人物と工藤とはまったくの別人でした。背格好がそもそも違います。ただ、三年前の同じころ、工藤は振り込め詐欺の出し子をやっていました。逮捕されたのは翌年の二月です。本人にあたってみようと思ったのですが、調書にある住所にはもう住んでいませんでした。消息不明です」

もう一度思い出す機会を与えるように、中窪は言葉を切った。だが、明美はまるで記憶がない。

「それで、それと事件とどういう関係があるんでしうか」

「あるかどうか、まだ証拠はありません。ただ、事件前後の状況を工藤三郎が知っている可能性もあるかと」

「工藤という人のこと、もう少しくわしく教えていただけますか。もしかすると、なにか思い出すかもしれません」

思い出しはしないだろうが、そう持ちかければ工藤三郎の情報を中窪は教えてくれると踏んだ。捜査状況を一般人の明美に話すのは違反かもしれないが、殺人の犯人につながるかもしれない手がかりを、中窪も必要としているに違いなかった。むろん、明美も同様だ。中窪は視線をそらし、ため息をつきつつ立ち上がった。

「ああ、そうだ。ちょっと用事を思い出しました。すぐ戻ってきますので、ここでお待ちください」

明美の返答を待たず、中窪はそのまま応接室を出ていった。

テーブルには捜査資料が開かれたまま残された。

しばしそのまま待ったが、中窪が帰ってくる気配はない。

おそろおそろ明美は資料を人差し指で自分の方に向けた。テーブルから手に取って読むほど図々しくはない。

逮捕時に撮られる写真、つまりマグショットがまず目に入る。クルーカットで日に焼けている顔が、こちらを向いている。睨にらみつけてはいない。どこか気の弱そうな顔つきだ。八の字眉毛とへの字になった口元が、困惑したような印象を与えた。

しばし目をあてていたが、明美にその顔を見た記憶はなかった。写真の下に中窪が打ち込んだ調査事項が並んでいた。

本籍地、生年月日。

そのあたりからは何の引っかけりも感じなかった。

経歴の中に、要一と同じ出身高校の名前がある。卒業年も中窪が言ったように同じで、あきらかに同級だった。ただし、友人だったかどうかまではわからない。

卒業から半年ほどして上京し、さまざまバイトを転々としたとある。大学へは進学しなかったのだろう。だから最終学歴が要一と同じということに中窪は気づいたのだ。

逮捕歴は、不起訴になった二度の窃盗がいまから四年前。担当は池袋署になっていた。振り込め詐欺の出し子として逮捕されたのは

二年前で、要一の事件があった翌年の二月だから、おそらく事件発生時には受け子をしていた可能性はある。

一緒に逮捕された仲間四人と起訴され、一年の実刑を受けた。

かやばちよう

現住所は茅場町かやばちようになっていたが、中窪の話によれば、すでにそこにはいないようだ。

だが、茅場町という文字を目にして、思い出した。

要一の遺品の中にあつたロッカーの鍵は、地下鉄茅場町のロッカーの鍵だった。

ちようどそのとき、見計らつたようにドアが開き、中窪が戻つてきた。

「失礼しました」

「いえ」

資料を元の位置に戻す余裕はなかったが、向き合つて座つた中窪は、わざとらしく調書を元の位置に戻した。

「いかがでしょう。どこかで名前を聞いたり、顔を見たりしたことはありませんか」

明美は首を振つた。

「さつき証拠はないということでしたが、中窪さんは事件にかかわりがあるとお考えですか」

その問いに、中窪は考えつつ口を開いた。

「あるとは言いきれません。ただあったとしても、直接ではないでしょう」

「というと」

「当時工藤が振り込め詐欺の出し子をしていたのは事実です。あるいはその件となにかしらの関係があった可能性はあるかと」

ずっと中窪の視線が向けられた。どこか探りを入れているような気配があった。

要一もその仲間の一人だったのではないかと言いたいのだろうか。殺人事件が仲間割れかなにかによって引き起こされた可能性を、中窪は思い浮かべているのかもしれない。

「仲間だったと言いたいのですか」

「いえ、そういうわけではありません。ただそういう読みもできるということですよ」

馬鹿げている。

そう思いはしたが、言下げんかに否定するだけの自信はなかった。

事件が起こってからあと、ことあるごとに「なぜ殺されたのか」という疑問が起きた。起きはしたが、納得の行く理由は考えつかなかった。

もしかすると自分の知らない要一の顔があったのではないかという不安がたびたび起きていたのも事実だ。じっさい工藤三郎という

男のことなど、要一はおくびにもだしたことはなかったのだ。

むろん、どんなに親密な関係の相手でも、完全に相手のことを知り尽くせるわけでないのは当然のことだ。とはいえ、要一が犯罪にかかわっていた可能性があるとするなら、いつもそばにいながらまったく気づかなかつたはずがない。

だいいち要一は金に困っていたようなことはなかった。週に三日ファミリレストランでバイトをして仕送りとは別に自由に使える金を稼いでいた。明美も同じ店でバイトをしていたのだから、そこは間違いがない。

考え込んでいた明美に、中窪は視線を向けてきた。

「経歴を拝見するかぎりでは、的場さんが振り込め詐欺の仲間だとは思えません。ですが、そういう仲間と接触していた可能性はあるわけではありませんか」

たしかに、明美にそれを否定できるだけの証拠はない。

その疑惑を払拭はつしよくできるのは、自分しかいないと思えた。それに、工藤という男が、要一が殺された理由や犯人を知っている可能性もある。もちろんその一方で、要一の知らない一面を知ることになるかもしれない。

それでも、いままでまるで手がかりがなかったことを考えれば、調べなくてはならないという気持ちが強まった。

「わかりました。わたしの方でも彼の友人だった人に訊いてみます」
中窪はうなずいた。

「助かります。目下、ちよつと手がかりになりそうなものを調べて
はいます。なにかわかったらすぐご連絡します」

なにを調べているのかは口にしなかった。

結局明美に訊いても無駄足だったという失望の方が大きかったの
かもしれない。

明美は一礼して席を立った。

その日は「エルニーニョ」には行かずにまっすぐ帰宅し、久々に
要一の実家に電話を入れた。

出てきたのは母親で、名乗るとすぐに懐かしそうな声が返ってき
た。

「お元気だったの。最後にお会いしてからだいぶ経つけれど」

神戸でおこなわれた葬儀と四十九日には出席したし、それからあ
とも何度か行き来をしていたが、警備員の仕事に就いたことと実家
を出たことを手紙にしたためたあと、連絡が途絶えていた。

「ずっとご連絡せずにいて申し訳ありませんでした」

「いいのよ。お仕事忙しいんでしょうしね。忙しいのはいいことよ」
そこから言葉が続かなかった。話せば要一の話題になってしまう

のを恐れている気配がただよっているせいだろう。

明美は用件だけ口にした。

「じつはお尋ねしたいことがあってお電話しました。工藤三郎という人をご存じですか」

一瞬息を詰めた様子があり、苦笑が起きた。

「あなたもなの。この前大崎署の女のかたからも問い合わせがあったんだけど、名前を聞いたこともないのよ」

自分の迂闊うかつさに呆れた。中窪が実家に問い合わせるのは、当然だった。ぬかりなく調査をしたのだろう。それでも消息がつかめなかったのだ。となれば、それ以上は素人の明美にわかるはずもない。

要一の母親に事情を説明し、大崎署の刑事に協力しているのだと打ち明けた。

母親が息をひそめた気配が伝わってきた。

「ありがたいけれど、でも、そろそろあなたには自分の道を進んでほしいわ」

今度は明美が言葉をのんだ。

明美のためを思って言ってくれたのはわかる。しかし、まだ三年も経っていないのだ。しかも、要一を殺した犯人は捕まっていない。地下鉄の警備員になった理由を打ち明けていなかったから、要一の母親は明美が新しい道を歩み出したのだと思っていたのかもしれない

い。

もちろん、そんなことができるはずもなかった。要一を殺した犯人を見つけないまま、いままでのことを忘れ去って前に進めるわけがない。

「あなたは若いよ。自分の人生を考えて」

無理を言っているのが伝わってきた。自分の息子のことを忘れてほしいと思っっている母親などいない。

「今年の暮れには三回忌さんかいきですから、ぜひまたうかがわせてください」
いたたまれない思いで、明美は話題をそらした。

しばし考えるらしい間があったあと、安堵あんどしたような口調が伝わってきた。

「そうね。いらしていただけると嬉しいわ」

「日時が決まったらご連絡いただけると助かります」
またちよつと間があつてから、今度は悲しげな声が届いた。

「いつかは区切りをつけないといけないとは思っているんだけど、でもなかなか……」

三

要一の母親の言葉を、明美は重く受け止めた。

たしかに「区切り」をつけなくてはならない時が、いつかはやってくる。

それは頭ではわかっていた。犯人を見つけることこそが、明美の「区切り」だと考えていた。だが、あらためて「区切り」をつけなくてはならないと言われたとき、じつのところ、犯人は永久に見つからないでほしいと思っていたのではないかと気づいた。

犯人が見つかってしまったら、そこで「区切り」をつけなくてはならない。

三年前のクリスマススイブに、明美の人生は否応なく変わってしまった。だが、頭の片隅で、いまだにそんなはずはないという思いがあったのかもしれない。犯人を見つけさえすれば、以前の人生が取り戻せると言い聞かせていたのではなかったか。

そんなはずもないのだが、生きていくためにはよりどころが必要だったのだ。しかし、犯人を見つけてしまえば、この先なにをよりどころに生きていけばいいのか。要一の母が「区切り」をつけようと思ってもできないでいるのも同じことではないのか。

そう気づいたとたん、中窪の継続捜査に協力しようという気が失せてしまった。

大学時代に要一と仲がよかった者は何人か心当たりがあったにもかかわらず、結局連絡を取るのはやめてしまった。

このまま、いまのまままで生きていくことが自分に与えられた道なのだ。要一の記憶とともに、自分は生きていく。

それでいいではないか。「区切り」など必要ない。

翌朝十キロのジョギングをしながら、明美はそう思い決めたのだ。
った。

それからの二日間、工藤三郎のことは頭から追い出し、たんたん淡々と警備の仕事に没頭した。

しかし、時間が経つうちに、なにかしら居心地の悪さが胃のあたりにはわだかまってきた。本当にそれでいいのかと感ずるもうひとり自分がいた。

じつは前に進むことに尻込みしているだけなのではないか。

犯人にたどり着いたとしても、前に進もうという気持ちになれなかったらどうしようと不安なだけではないのか。

そもそも、要一がいまの自分を見たら、犯人を追い求め続けることを、望むだろうか。

さまざまな思いが押し寄せた。

誰かに相談したいと思った。いままで自分の過去を話していなかったが、町村たちに打ち明けて意見を聞きたいと思った。

そんな気持ちをいだいて、その日は「エルニーニョ」へ向かった。

三日前の研修以来だったが、町村と原口はすでに来ていて、生ビ

ールを半分ほどあけていた。

もちろん、すぐに話を切り出すわけにも行かない。とりあえず明美もビールを頼み、あらためて乾杯をした。様子を見て話そうと考えていたのだが、なかなか切り出す勇気がなかった。いままで築いた関係がおかしなものになってしまうような気にもなった。黙ってジョッキを傾けていると、原口が唐突につぶやいた。

「きょうも来ないのかな」

店のドアに目をやっている。奥野のことを言っているのだ。

「べつに集まって飲むのは強制じゃないんだからさ」

「でも気になるじゃん」

町村の突き放した口ぶりに、原口は口をとがらせた。

「変に気をつかわれるのはかえって迷惑だよ。べたべたした付き合
いっての、よくないよ」

「だって同僚だし友達じゃん」

町村が手にしていたジョッキを置いて、顔を突き出した。

「親しき中にも礼儀ありってこと」

「知ってるわよ、それくらい
の言葉」

「言うは易し、行は難し
ってわけだね」

「それも知ってるし」

馬鹿にするなど言いたげに原口は胸を張った。

「だったら意味言ってみな」

町村に挑まれて、うまく説明ができないらしい原口が、明美に助けを求める視線を向けてきた。

「なにごとも口にすることは簡単だけれど、それをじっさいに行動に移すのはむずかしい」

説明しながら、まるで自分のことだと明美は思った。

町村がうなずき、原口に向かったため息をついた。

「知ってても、それを使いこなせないなら意味ないんだよ」

「はいはい。すみませんでした」

原口が肩をすくめてみせた。

「ま、来る来ないは、本人の勝手なんだから。友達だから気にかけるのはいいけど、度が過ぎるとお節介せつけいになるし、もっとひどいと束縛ばくになる」

「そうか。まあ、そうだよね」

原口も納得したようだ。

そんなやりとりをしつつも、結局研修日以降、誰も奥野と顔を合わせていなかったから、なぜ奥野が研修に来なかったのか、明美ばかりでなく原口も町村も気にかかつてはいるのだ。

明美は一杯目のジョッキを空け、二杯目を注文しようとしてカウンターの方に振り返った。

店のドアが開いた音がしたのは、そのときだった。

三人の視線はひとりでにそちらに向けられた。三人がとらえたのは足早に近づいてくる奥野孝子の姿だった。

「どうしたのさ。研修サボって」

町村がくだけた調子で尋ね、やってきた奥野をさりげなく迎え入れた。

「まさか男とデートだったりして」

原口もからかう口調で奥野に声をかけた。

「ごめんなさい。急用ができて。デートじゃないけど」

苦笑を浮かべて答えながら奥野はボックス席に腰をおろし、カウンターの中にいたマスターに向かって水割りを注文した。

「ま、毎度のこと、たいした研修じゃなかったんだけどね」

「たしかに」

町村の言葉に、原口が応じた。

研修を欠席したことにはそれ以上触れず、あらためて四人で乾杯をすると、やっといつもの雰囲気になったように感じられた。

最初のうちは無駄話がつづいた。だが、仕事の愚痴ぐちが出ると、そこから徐々に、目下、原口が心配している警備員職の継統があるのかどうかという話題に移っていった。

「なんか新しい情報、旦那さんから聞いてないの」

原口が町村に取り纏とるような目で尋ねると、町村は三杯目のジョッキを空けてから、手招きして顔を寄せると合図した。

三人はおのおのわずかに顔を前に出した。

「これはぜったい漏もらすなって言われてるらしいんだけどさ」

百五十人ほどの私服警備員はこれから個別に各地区の統括官と面接をすることになっているという。そこで継続の意思があるかどうか尋ねられるというのだ。

「なんでそんなことすんのさ」

明美も思い浮かべた疑問を、原口が口にした。

「本人のやる気があるかどうかを尊重するってことでしょ。嫌なら辞めてもらっていいってことよ」

「じゃ、やりたければやれるってことよね」

町村は、原口の問いに首をかしげた。

「それはわからないけどね。ただ」

言葉が続けようとした町村を遮るように、奥村が重々しくつぶやいた。

「勤務評定ひんぎょうていですよね」

目を見開いた町村が、奥村に顔を向けた。

「なんだ、知ってたんだ」

「どういうことですか」

明美が尋ねると、奥村がつづけた。

「いつもとは思えないけれど、わたしたちの勤務状況は査察で見回っていた者にチェックされていたのよ」

「それって単なる噂だったんじゃないの」

原口が口をとがらせた。

「かもしれないけどさ。でも、考えてみなよ。傍はたから見れば地下鉄に乗りまわっているだけの仕事なんだから。車内でトラブルがあったときに対応しないような者がいれば、警備員としては失格だから」

「だからって見張ってるって、ひどいじゃない」

「でも、そうしないと手を抜く者もいる」

奥野のぴしりとした口調に、原口はため息をついた。

「たしかにそのあたりは信頼関係で成り立てばいいわけだけれど、そうもいかないってこと。やらないといけないときに何もしいってことだと、まずいわけだしね」

町村の説明に、明美もうなずいた。

手を抜こうと思えばいくらでも抜ける仕事だが、必要なときにしっかり対応ができるかどうかが問題だった。じっさいに乗客にトラブルが起きたとき、的確な対処をできているなら、本当に査察官がいたとしても文句を言われる筋合いはないだろう。

そんなことを考えていると、ふと原口が視線を送ってきているの

に気づいた。眉をしかめ、ちらりと奥野のほうに目を向ける。

とっさに理解した。

研修を欠席したことで勤務評定の件につながりがあるのではないかと原口は考えたらしい。それを奥野に訊いてみると言っているのだ。四人の中でいちばん年下の明美にその役回りを任せたいのだから。

「あの、もしかして。研修欠席したこといまの話と、関係あるんですか」

おずおずと尋ねた明美に、町村が肘で明美のわき腹をついたが、遅かった。

奥野がちらりと明美に目を向けてから、手にしていたグラスを干してテーブルに置いた。

「辞めることにしたの」

あっさりと答えた奥野の言葉に、原口と町村があっけに取られた顔になっている。明美も同様だっただろう。

「辞めろって言われたわけじゃないのよ。自分から辞めるって申し出たの。私には警備員の資格がないから」

「でも、べつに手抜きしてたわけじゃ」

言いかけた明美は途中で口をつぐんだ。暴力沙汰の件をわざわざ持ち出すに等しかった。奥野が辞めると言い出した原因はそれ以外

にない。

明美たち三人は黙りこくり、しばしの間があった。

それを破ったのは、奥野だった。

「間違っていたのに、気づいたの」

吹っ切るような口調は、重荷を下ろしたと言いたげだった。

いったい何を間違えていたというのか。それだけではわからなかった。

「それって、どういう」

原口が言いかけると、町村がかぶせた。

「理由は訊かない。自分で決めたんだから、あたしらがどうこう言える立場にはいないしね。でも、困ったことがあったらいつでも言ってくるほしい」

「ありがとうございます。みなさんにはよくしてもらって感謝しています」

奥野は明美たち三人に軽く頭を下げた。

暗黙の裡うしろに、その話はここまできとなり、その晩は早々とお開きになった。

結局明美が相談を持ち出すきっかけなど、まるでなかったのだった。

四

しかし、何を「間違っていたことに気づいた」のか、自分のこと以上に奥野の言葉が気になってしまった。

辞めようと決心した理由は、おそらく人を人とも思わない言動をする者に対して振るった暴力なのだろうと見当はつく。それ以外に思いつく理由はなかった。暴力を振るったのが「間違いだった」というなら、筋も通っているし、納得もできる。

だが、「エルニーニョ」で目にした奥野の様子は、それほど単純なようには見えなかった。だいいち、ちかごろでは暴力を振るって停職処分にはなっていない。

暴力問題よりもっと深い理由があつて辞めると言い出したような気がするのだ。それが何なのか、明美には引っかけを残していた。

町村の言うように本人の決めたことなのだから口出しをするべきではないという考えもあるだろう。むろん、明美もおせっかいなことをするつもりはない。ただ、奥野が辞めると言い出した本当の理由を知りたかった。知らないままで奥野が辞めてしまうのは納得が行かないのだ。

「おい、聞いてるか」

注意をうながされて、あわてて背筋を伸ばした。

「すみません。ちょっと考え事を」

目の前に座っている統括官の三木が苦笑を漏らし、手にしていた書類に目を落とした。

町村の言っていた「面接」に早くも呼ばれ、応接室で向き合っていたのだ。「エルニーニョ」で飲んだ翌日は非番で、その次の日が早番になる。その早番を終えて渋谷駅の事務室に戻ると、点呼のあとで隣の応接室に来るようになると言われたのであった。

「聞いていなかったようだからもう一度言うが、この仕事が本格的に導入されると、いまよりも勤務はきつくなる。始発から終電まで時間帯が広がるし、ローテーションも変わるだろう。今後もやっていく気があるかどうかだけ各人に打診してほしいというから、個別に話をしている。いま決める必要はない。今回は意向を知りたいということだ」

「はい。引き続きやっていきたいと考えています」

三木は書類に目を落としたまま、うなずいた。その書類が「勤務評定」なのかもしれない。

「あの」

「ほかになにかあるのかな」

いかつい顔を上げた三木が目を向けてきた。

「一週間の減給があったと思いますが、そういったことは考慮され

るんでしょうか」

おそろおそろ尋ねると、また苦笑いを浮かべた。

「まあ、多少はあるかもしれない。しかし、賞罰は正式に導入が決定した時点でリセットすることになるだろう」

「査察のかたからの報告もリセットでしょうか」

尋ねられている意味がわからないというように、三木の眉が寄せられた。

「なんだ、その査察っていうのは」

「わたしたちの勤務状況を見回っている役目の人がいると聞きました」

一瞬の間があつてから、呆れたといった笑いが短く起きた。

「どこからそんな話を聞き込んだんだ。そんなことをしているとしたら、きみたちを疑っていることになるじゃないか。だいいち、そんな人員をさくだけの予算もない」

「では、単なる噂だったんですね」

「言っておくが、そういういい加減な情報を拡散しないでもらいた
い」

「申し訳ありません」

少し迷ったようだったが、三木があらためて口を開いた。

「いや。本当のことを言えば、最初はそういう役目を設置する必要

を言い立てた上層部もいたんだ。研修でも、きみたちの仕事は車内の警備をするのが目的だと言い聞かされているはずだ」

明美は黙ってうなずいた。その口ぶりからして、三木は違う考えを持っているようだ。

「むろん、車内警備の仕事を否定はしない。しかし、それだけではないと思っている。これは個人的な意見だが、きみたちはツアークンダクターといったところか」

「ツアコン、ですか」

「まあ、たとえば悪いかもしれないが、そんな気がしている。乗客がそれぞれの目的地に安全に向かうための手助けをさりげなくする仕事だ。それも役割のひとつだと思う」

言いたいことは、わかる気がした。

しばし三木の言葉を胸の内で繰り返してから、明美はもう一度うなずいた。

「そういった仕事の方が、むしろ、警備より大事なこともかもしれない。警備のもっと手前でしたらとツアコンができていれば、トラブルが未然に防げることにつながりもする」

「はい」

「最低限の職務はできてほしいが、それ以上のことは本人が臨機応変に対処するのが第一だ。ちよつとした失敗なら、誰しもあること

だ。失敗から学んでいけばいい。最初から失敗しないように監視して、傍から余計な口出しをするようなことはすべきではない。だからわたしは査察には反対した」

人を疑うのではなく、まずは信じる。

そういうことかもしれない。ここまで打ち明けてくれたのは、明美の父親と大学時代に親しかったせいかもしれない。

「ま、ともかくきみの意向はわかった。年明けには正式に導入されることになる。もつとも、公表はできないがな」

その点は町村が言ったように、私服警備員がいると知られては意味がないからだろう。

「ついでに言っておくと、この一年の経験があるから少しは給料も上乘せしてくれるそうだ」

三木がそう言って笑顔を見せ、面接は終わった。

事務室で出勤表を確認してから通用口に出て、町村と原口に「査察は単なる噂です。勤務評定も特に重要視されないうみです」とメールをした。まだ面接の番が回ってきていない可能性もあったし、出勤表ではすでに退勤していたからだ。

だが、奥野はまだ戻っていないらしく、出勤表に名前が残っていた。

どうするか迷うことはなかった。事務室の外で、奥野の帰ってくるのを待つことにした。

自分の話を打ち明けて相談したかったし、奥野が辞める理由も知りたかったのだ。

午後五時近くになって、やっと奥野が戻ってきた。明美に気づかず事務室へ入ろうとする奥野を呼び止め、ちよつと相談があるのだと告げると、眼鏡の縁にちよつと手をやってから、わかったと答えた。

点呼を終えて出てきた奥野は、明美をいぶかしく思うわけでもなく、警戒もせず、「エルニーニョ」に行くかと訊いてきた。どこでもいいと答えると、それなら別の店にしようと言って、歩き出した。連れていかれたのは明治通りを少し原宿方面に行った左手にあるバーだった。

「ここレコードのリクエストできるのよ」

そう言って開いた扉の奥にある店内はさほど広いものではなかったが、落ち着いた感じの店だった。さほど音楽にはくわしくはなかったが、流れているのが古めの洋楽ロックなのはわかった。ジャズやロックが中心なのだろう。

ボックス席は多くない。その代わり店内の壁一面にレコードが並んでいる。明美の世代はすでにCDになっていたから、これほど大

量のレコードを目にしたのは初めてだった。

客の大半はカウンターにとりつき、ひとりで来ている者が多かった。

奥野は狭いボックス席に明美をうながし、向き合って座ると、すぐにボトルが運ばれてきた。

「バーボンだけど、これでいいかな」

何度か飲んだことがあったから、それで構わないとこたえた。

「よく来るんですか」

黙っていてもキープしているボトルが出てくるところをみると、常連のようだった。

「秘書をしていたころには毎日のようにね。じつはいまでもエルニ―ニョで飲み足りなかったときには、来てるの」

恥ずかしそうに口元をゆるめた。

水割りを作ってもらってグラスを合わせる。コルクのような匂いが鼻に抜ける。おいしいと思えないのは、楽しむためにここへ来たわけではないからだろう。

腹に響く音楽を耳にしつつ、どう切り出そうかと迷っていると、奥野が目を伏せがちにして微笑んだ。

「どうして辞めるのか、聞きたいんですよ」

あらためて相談があるなどといったのだから、奥野が察していな

いわけがなかった。

「間違いに気づいたって言ってましたけど、間違いってなんですか」
率直に尋ねると、奥野の視線が窓の方に向けられる。どう説明しようか考えているようだった。

レコードが変わり、どこかで聞いた記憶のある音楽が流れだした。
静かな調子でバラード調のものだった。

「二度停職になっているのは、知ってるでしょ」
気づくと奥野の視線が戻されていた。

「知ってます」

「それが理由ってことじゃ納得できないかしら」

「最初はそうかと思っただんです。町村さんや原口さんはそれで納得したから、あのとき問いたださなかったんだらうけど。でも、なにか違うような気がして」

「そう」

目を伏せた奥野はグラスを口に持っていく。それからまたしばし考えるような間があった。だが、決心したように顔を戻した。

「穂村^{ほむら}さんだけよ、気づいたのは」

意味を捉えかねて、明美は奥野に目を向けた。

「実家が宮城だって、知ってるわよね」

「はい」

「大学は東京だったの。高校卒業と同時に逃げ出してきたわけ」

「逃げ出したんですか」

「家族も住んでいる場所も、息苦しかった。親は何にでも口出ししてきて、やりたいことがまるでできなかった。だからずっと反発していたわ。地元の大学を受けるって嘘を言って東京の大学を受験したの。なかば家出よ。仕送りなんかないから奨学金もらって、なんとか卒業したの。帰省もしなかったし」

みずからをあざ笑うように口元をしかめた。

東京で企業に就職し、もはや家族とは完全に切れたと思っていたが、そのとき起きたのが東日本大震災だったという。実家は津波に襲われた。あわてて連絡を取ろうとしたが、無駄むだだった。両親とふたりの弟は半月後に遺体で見えられた。

「理不尽よね」

それまで淡々と話していた奥野の声が裏返った。グラスをあおり、大きく息をつく。

「それがきっかけで会社を辞めた。精神的に調子を崩しちゃったのね。家族を捨てたという後ろめたさがあったの。もし自分が東京に出ないで地元に行ったら、みんな亡くなることもなかったかもしれない、なんて思ったりして。そんなことあるわけないんだけど、そういう状態が三年くらい続いたわ。このままじゃまずいと思ったと

き、この仕事の募集を見つけた。前に進もうと決めたのよ」

グラスを両手でおい、ふたたび奥野は黙りこくった。

どう言葉をかけていいのか、明美にはわからなかった。気持ちはわかるなどと軽々しく言えるはずもない。

「ところが、前に進もうとしたら、相手のことも考えずにひどいことする人を見るとかっとなるようになった」

人を人とも思わないような言動に怒りを覚えるのは明美でも同じだが、家族を亡くしたことが原因で人一倍それが強いのだろう。

「警備の仕事をしていると、いろいろな人と接するでしょ。そうすると、嫌でも人の醜い部分が見えてくるのよ」

それは一面では間違っていないが、人のいい面も見られるのではないか。

明美はそう思いつつも、口を挟まずにつぎの言葉を待った。

「一年近く仕事をしてきて、あるときふっと気づいたの。わたしがかっとして手を出してしまった人や、出しかけた人って、自分勝手だったり、空威張りからだったり、損得しか考えていなかったり、独りよがりだったり、要するに思いやりのない人ばかりだった。でも」

言葉を切った奥野の両肩あたりがわずかに震えているようだった。

「でも、わたしがかっとしていたのは、わたし自身に対してだったのよ。気づいたのよ。相手のことを思いやらずにひどいことをして

いたのは、なんのことはない、自分自身だったって」

五

これっぽっちも落ち度がないまま、津波で命を失った家族に対する後ろめたさとやり場のない怒り。その結果、ひとりひとりの人間を大切にしなければならぬという思いが奥野の心を占めている。

だからこそ人を人とも思わない言動をする者に対して奥野は暴力を振るってしまう。人を大切にしない者には鉄槌てつゐを下す。

そこまで思いつめていたということかもしれないが、たぶん過去の自分を罰していたのかもしれない。ただ、それに気づいたことが理由で警備員を辞めるというのは納得が行かなかった。

警備職は状況によって実力行使に訴える場面に遭遇そうぐうしやすい。そんなところにいるなら、これからも暴力沙汰を起こしてしまうかもしれないというのが、奥野の言い分だった。

だが、それに気づいたのであれば、気づきもせずにいる者よりよほど自制ができるだろうし、自分の姿勢を改めることもできる。たちの悪いのは気づかないまま傍若無人ぼうじやくべにんに振舞う連中にほかならない。

そんなことを明美は訥々じつじつと説明し、三木から聞かされた話をした。

「ツアコン、ね。言われてみれば、たしかにそういうところもあるわね」

奥野は素直に納得したらしく、寂しげに笑った。

「奥野さんはツアコンの仕事にふさわしいと思います。いつも落ちていて、判断も的確にできるし。口より先に手が出るのだから、最近はないわけだし。それにどうしても力づくで対処しないとならないことが必要な場合だってありますし」

慰めにも説得にもなっていない気がしたが、明美の気持ちなぐさはわかってくれたようだった。もう一度考え直してみると言って、その日は別れた。

結局、明美自身の相談をまたもや持ち出し損ねた格好だったが、奥野の事情を聞いたおかげで内心いっぱいいっぱいだったのだ。

ただ奥野もまた亡くした家族を忘れられずにいるという点では、明美と同様だと思えた。

そう、「区切り」をつける必要はあるはずなのだ。しかし、そうしてしまうと自分が人でなしのように感じられる。自分はそれほど亡くした相手を思っていなかったのではないかという、裏切りに似た罪悪感がある。

要一の母親だとて、それが簡単でないことはわかっているはずだ。要一を忘れることはないが、それにこだわっていれば前に進めない。

しかし、進もうとすれば、どこかで「区切り」が必要になる。

その決心を阻むのが「あのときああしていれば」という後悔なのだろう。それが残された者にはのしかかってくる。奥野はそれに押しつぶされかけていたのかもしれない。要一の母親にしても、明美にしても、程度の差はあれ、同じなのだ。

その日は中目黒なかめぐろのマンションに帰ると、化粧を落としてすぐに寝てしまった。精神的にひどく疲れていた。

翌日は遅番で昼前に出ればよかったのだが、携帯の呼び出し音で起こされてしまった。まだ九時を回った時刻だった。

「申し訳ありません。お休みでしたか」

明美のシフトまで中窪が把握しているわけがないから、仕方がない。

「いえ、きょうは遅番なのでそろそろ起きようかと」

「じつは工藤三郎の居場所がわかったもので」

こちらの言葉を遮り、急せぎ込こむような調子が伝わってきた。

何を言っているのか、最初は戸惑った。まるで手がかりがない状況で、どうやって見つけたというのだろう。

「駄目もとで本庁と神奈川、千葉、埼玉の県警交通課に検索をかけてもらったんです」

ここ一年で違反キップを切られていないかどうか調べたのだという。本庁である警視庁は簡単だったが、ほかの県警は渋りがちだったそうだ。しかし、なんとか情報を掴んだのだという。

「ただ、違反をしたわけではなく、バイクの運転中に後続車から追突され、全治一週間の怪我をしていました。三か月前のことです。

埼玉県警が事故は処理しました」

つまり、工藤三郎は現在埼玉県内に住んでいるらしい。

知らぬ間に、明美は身体に力が入っていた。いままでまったく犯人の手がかりがなかったが、三年近く過ぎて、もしかすると犯人を知っている可能性のある人物が見つかったかもしれないのだ。

そう考えると、直接顔を合わせて話を聞きたくなった。

「どうされるおつもりですか」

用心深く、明美は尋ねた。

「相手がどう出るかわかりませんが、捜査の一環として今夜事情を聞きにいくつもりです」

「わたしも、同行させていただきませんか」

思い切って口にする、中窪は一瞬押し黙り、しばし考えている様子だった。そして困惑げな声が返ってきた。

「お気持ちはわかりますが、捜査の進捗状況を報告するだけのつもりでした。工藤が防犯カメラに映った犯人でないことははっきりし

ていますし、ここは」

洪る中窪の言葉にかぶせた。

「でも、犯人につながる手がかりを聞き出せるかもしれないということですよね」

「それはそうですが」

「当時、わたしもどこかで工藤に会っていたかもしれませんが。的場さんがわたしのことを説明していたなら、思い出して協力してくれる可能性もあります。警察のかたが突然行ったら、かえって警戒されることもあります」

また考える間があった。中窪の言葉を待たずに、明美は口を開いた。

「一般人であるわたしを同行させるわけに行かないのはわかっています。ただ考えてみてください。もし工藤に警戒心を抱かせて、また行方がわからなくなってしまうたら、いままでの苦労が水の泡になってしまうかもしれません」

低くうなる気配が伝わってきた。

「どうしてもですか」

「お願いします」

諦めたらしく、中窪はこたえた。

「わかりました。ちょっとお待ちください」

しばし通話口から離れた。五分ほど経ってふたたび声が届いた。
「課長に許可をいただきました。ただし、これは特例です。被害者の関係者に立ち会ってもらわなければならないという形にしてみました」

「ありがとうございます」

「ただし、不測の事態が起きることもあり得ます。くれぐれも注意するようお願いします」

「その点は、お約束します」

胸を撫なでおろしつつ、明美はこたえた。

工藤三郎の現住所は川口市だという。最寄りの駅はJRの西川口にしかわぐち駅。歩いて十五分ほどのアパートに住んでいるらしい。

小さな飲食店で下働きをしているようだ。一時は振り込め詐欺に加担していたが、いまはまともに働いているのだろう。

中窪から電話をもらったその日は遅番だったが、すぐさま渋谷の事務所に休みをもらいたいと連絡を入れ、仕事には行かなかった。行ったとしても仕事にはならないと判断したからだ。

昼間のうちに工藤の働いている店に行ってもよかったが、そうすると変な誤解を生んで工藤に迷惑がかかるかもしれないというので、夕方まで待ち、時間を見計らってアパートに帰宅してから訪問する

ことに決まった。

午後六時に渋谷駅で落ちあい、山手線で田端駅たばたまで行き、そこで京浜東北線に乗り換えた。

会ってからずっと、中窪と明美は必要以上の言葉を交わさなかった。闇につつまれた街が光に満ち、車窓を流れていく。

西川口駅に降り立ったのは、七時過ぎで、かなり冷え込んできていた。

西口の改札を出たところで、中窪が立ち止まった。

「夕飯、どうしますか」

明美は黙って首を振った。食欲がなかった。いや、食事などして
いる気持ちの余裕はなかったのだ。

中窪はわかったというようにうなずき、ふたたび歩き出した。

しばらく大通りを進み、やがて脇道にそれると、住宅街に入った。帰宅する者の姿がまだちらほらとあるが、思ったよりもひっそりとしていて、九時を過ぎたら人通りも絶えるのではないかと思われた。中窪がメモした住所を手に、何度か道に迷いつつたどり着いたのは、かなり古びた二階建ての木造アパートだった。周囲に塀もない。

「二階の三号室です」

その言葉を耳にしつつ目で追っていくと、すでに帰宅しているよう
うで、窓越しに明かりが見えているのが見えた。

その窓を見上げながら、明美は呼吸を整えた。

「いいですか」

顔を覗き込んできた中窪が尋ねた。明美はうなずき、一步踏み出した。

外階段をあがり、ドアの前に立つ。中の様子をうかがおうとしたとき、けたたましい破裂音が響いた。タイヤがパンクした音かと思ったが、ふいに明美は中窪に突き飛ばされた。

わけが分からず中窪に目をやると、その表情は引きつっている。

「銃声です」

映画などで聞く音とはかなり違っていたから、明美はまさかと思った。いったいなにが起きたのか。

身構えつつ中窪がドアのノブを回したが、開かない。

「工藤さん、警察です」

言い終える前に、中窪はドアを蹴りあげた。何度か蹴って、やつとドアが開いた。

土足のまま部屋に飛び込んでいく中窪につづき、明美も身をかがめながら走り込んだ。部屋には誰もいない。ただ、窓が開放たれて冷気が入り込んできていた。そこから逃げ出したのは明らかだ。

「待ちなさい」

駆け寄った中窪が窓から怒鳴った。明美も横合いから覗くと、街

灯に照らされた姿が走っていくのが見えた。顔は見えなかった。

だが、その走り去る後ろ姿に、明美は見覚えがあった。

要一を殴って逃げていった男。それに間違いなかった。

では、工藤三郎と偽いつわってここに住んでいたのは、その男だったのだろうか。

いや、そんなはずはない。

厳しい表情の中窪も同様に考えたのか、明美に目を向けてきて、首を振った。

そのとき、玄関と部屋の途中にあったトイレから呻うめきが聞こえ、開いたドアから人影が転がり出た。

駆け寄った中窪が横たわった男を抱える。腹を両手で押さえ、その手の間から血が流れ出ている。苦悶くもんに歪ゆがんだ表情だったが、工藤三郎に間違いなかった。

「しっかりしてください」

声を高めたあと、明美に視線を向けた。

「救急車を」

言われて明美は携帯で一一九に番連絡した。すぐ来るという返事を確認して通話を切ると、明美も工藤の顔の前にかがんだ。

「いま救急車がきます」

耳に届くように叫ぶと、閉じていた目が開かれた。

「やつら、ごうとうを」

それだけ口になると、がくりと首を落としてしまった。

「工藤さん、しっかり」

中窪が声をかける。だが、意識が混濁こんだくしてしまっていた。

「聞きましたか」

明美は息をつめて中窪に尋ねた。たったいま工藤が口にした言葉が聞き間違いではないかと思ったのだ。

中窪はうめいた。

「たしか、やつら強盗を、と」

それはつまり、どこかで事件が起きる可能性があるということだ。

それはいつのことで、何者が引き起こすというのか。

要一の件のためだけでなく、工藤をこのまま死なせるわけにはいかなかった。

車のサイレンが近づいてくる音を耳にしつつ、明美はそう思った。

(つづく)